

## 南方（ビルマ）

安らかに眠れ戦友よ ビルマの野に

福井県 黒田茂樹

「勝って来るぞと勇ましく、誓って国を出たからは、手柄たてずに死なりようか……」と露営の歌などの軍歌がラジオから流れ、支那事変から大東亜戦争と続く中、私達の農村地帯でも、若い人たちが次々と出征して行きました。

私は大正十二（一九二三）年九月十五日、黒田家の長男として生を享けました。父は昭和十五（一九四〇）年、五十五歳で死亡、残された六人の子供と農作業に母は大変な苦勞でした。

昭和十三年三月、片上尋常高等小学校高等科二

年を卒業し、長男でしたので家業の農業を手伝いながら青年学校に通いました。

昭和十八年六月、徴兵検査を受け、残念ながら乙種合格でした。そして昭和十九年四月一日、敦賀市の歩兵第十九連隊に入隊の召集令状を受取り「やっと来たぞ」と私も母も喜びました。かつて父が野砲連隊に入隊したことがありましたが、母も働き盛りの息子を手放すことは辛いことだったと思いますが、我が子をお国に捧げることは黒田家の名誉と喜んでくれました。

入営当時は隣近所の皆様に鯖江駅にて「万歳！万歳！」の声に送られ、私自身は御国のお役に立つ晴れの門出と嬉しくもありました。第十九連隊に入隊した新兵は五百人を数え、切迫した戦局を

物語るような光景でした。そこで私は第一大隊第二中隊宇野隊第四班に配属され、初年兵教育を受けることになりました。私的制裁は禁止されてはいましたが、毎日の厳しい内務班教育と軍事訓練は、これが軍隊だと身に感えました。

一期の検閲までの二カ月間は「あつ」という間に過ぎ、班長より私達は祭兵団の補充隊員としてビルマ方面に派遣されると知らされました。そして一泊二日の外泊が許可され、六月十五日なつかしい我が家に帰りました。東京に住む姉が千人針をくれ、姉妹たちと親類の人たちも集り楽しい一夜を過ごしました。

外泊を終えて帰隊すると営門で私物検査に待機中、突然空襲警報が発令され、私物検査は中止となり急いで中隊へ帰りました。私と鈴木二等兵は補助憲兵要員でしたので、軍曹を班長として五人編成で、自動車で滋賀県四日市航空隊憲兵分遣隊に夜半に到着し分遣隊長に配属申告をしました。

一つ星の私たちの仕事は雑役でした。しかし分

遣隊の食事は、航空隊給与で、副食も多く連隊での食事と比較して雲泥の差がありました。夕食後連隊から初年兵二人は至急帰隊せよとの命令があり、米原発の最終列車で急ぎ帰隊しました。私たち初年兵は、ビルマ派遣「祭」第七三七一部隊（第十五師団）部隊に編入を命ぜられ、六月二十一日出発予定と命令が下されました。

初年兵五百人は軍装を整え、ビルマ派遣「祭」歩兵第六十七連隊補充隊として編成され、輸送指揮官は私たちの中隊長宇野中尉で軍装検査も終了し、出発は二十一日午後一時と発表されました。

当日、営庭に整列、連隊長より「日本の軍人として恥ずかしくない行動をし、立派な戦果を挙げてくれるように」との激励の言葉を受け、ラッパ隊を先頭に威風堂々と連隊を後にしました。敦賀市入口大橋の手前で列車待ちの休憩をしていますが、出発を知ってか肉親の人たちの見送りの姿も見えました。程なく軍用列車に乗車、故郷の山々に見送られ軍用列車は下関を目指しました。

今朝からばたばたと忙しく、出発疲れか夕食後はほとんどの者が眠ってしまい、目が覚めたときはもう山口県でした。十時ごろに下関駅に到着、市中は私たちと同様南方戦線に向う兵隊たちでこった返でした。

夕方、三、〇〇〇トン級の貨物船「金龍丸」に乗船、三段に区切られ船中はまるで蒸風呂のような暑さでした。そして船には既に朝鮮で編成された狼兵団が乗船していました。

下関港を出港した「金龍丸」は門司港に寄港、私たちは下船してその夜は埠頭で一夜を明かし、別船「宇賀丸」(四、四〇〇トン)に乗船、この船中も三段棚で船室中は狼兵団、船首部分に第六十連隊、船尾部分に第六十七連隊と区切られていました。九州の遠ざかる山々に手を振りながら別れを惜しみました。

玄界灘は話の通り波高く、船は上下に揺れ、私は船酔いせずに助かりましたが、船酔いする者が続出しました。玄界灘を通過するころには、三十

隻ぐらいの大きな船団となり、駆逐艦と駆潜艇五隻が円形に護衛し、前方には「第二凶南丸」の捕鯨船の字が見える大きな船がいました。甲板には対潜、対空監視所が設置され、狼兵団の人たちが監視役の任務に就いていました。

上官から、台湾海峡は米潜水艦が出没している危険な海峡であるが、この大きな船団には護衛艦も多いので危険度は少ない。余り気にするなどの説明がありました。たまたま飯上げ当番で甲板で順番を待っていると、対潜監視所の伍長が青年学校の教官の松塚伍長さんそっくりだったので「伍長殿！」と声をかけますと「やあ黒田か」と答えられびっくりしました。松塚伍長さんは召集で狼兵団吉田連隊の一員としてビルマに行くのだと言っておりましたが、これが最後の面接でした。

船団は途中高雄港に入港し、食糧品等の補給で三晩停泊しました。高雄港では船団も分れ護衛艦も二隻となり、船団はさらに南下しました。途中、突然黒い大きな飛行機が超低空で飛来し、船上を

飛び去り「ひやり」とさせられたが無事マニラ港に入港、コレヒドール島を左手に停泊、一同下船して港の近くの公園で二晩夜営しました。

この時期まではマニラも平穏無事でした。入港して三日目、マニラ港を出港してシンガポール港へ向いましたが、米潜水艦出没の報により急遽ボルネオ島沖に避難し、しばらく状況を見ることになりました。二日後その沖を出発し、七月十日昭南港と名前を変えたシンガポール港へ無事到着しました。門司港を出港してから十七日目で、直ちに上陸を開始しました。

高雄港でバナナを食べ過ぎて入院した人たちの装具や小銃等までの陸揚げと宿舎までの運搬で、船旅での体力の低下もあり、宿舎への夜行軍は大変な苦勞でした。

宿舎は新世界の近くで大通りに面したにぎやかな場所でした。シンガポールの駐留は十日間でしたが船の倉庫に入れておいた小銃は赤錆がついて手入れに困りました。バンコク行き列車に乗車の

ため行軍中に命令が変更になり高台の宿舎に向いました。ここが有名なブキテマ高原で、山下将軍と英軍のパーシバル将軍との会見の場所と聞き、感慨無量でした。

翌日、旅客列車で出発、ジョホール鉄橋を渡る時、マレー半島から渡河してシンガポールに攻め入る日本軍が、河に流された油に火を付けられ、日本軍が多数死亡したと聞きました。

列車は夜明け前にクアラルンプールに到着、給水食糧の補給と休養を取り、クアラルンプールを出発後は昼夜分たず走り続けました。そして八月二日、タイ国のバンコクに到着、夜明けの道を宿舎に向かつて行軍しました。泥水の中に並んで建っている小屋の棟が宿舎といわれました。

その小屋は竹の骨組幅六メートル、長さ三十メートルぐらいの小屋で、泥水の中を魚が泳いでいて不衛生も甚だしいものでした。この宿舎は三日で引き揚げ、メナム河の新埠頭にある四階建ての洋館に引っ越しました。日課は、朝点呼後に体操、

ルンピン公園まで往復四キロの歩行で体力増進を  
図り、上官との懇談の時間もありました。

バンコクには「義」兵団が駐留しており、福井  
県、滋賀県出身者が多く、私たちの連隊が駐屯す  
ると多くの人たちが面会にきました。先輩の  
皆さんたちは口を揃えてビルマ各地での敗戦、イ  
ンパール作戦の悲惨さ、白骨地獄街道での日本軍  
の悲惨な状態や、雲南省での玉砕、サイパン島の  
玉砕、東條内閣の崩壊等を教えてくれました。そ  
してビルマに今から行く者は、死に行くようなも  
のだとも聞かされました。同郷の勝沢伍長も悪化  
しているビルマ戦線のことを注意していましたが、  
ここまで来た以上どうしようもないと、気に留め  
ることもありませんでした。

八月二十六日、バンコク出発、三十日泰緬国境  
通過。昼ごろ大きなニッパ造りの駅に到着、こ  
の駅で白人の捕虜を初めて見ました。彼らはタバ  
コをくれながら「来年はお前たちを迎えに来る  
よ」と笑っていました。

やがて列車は大きな鉄橋を渡り、崖下には転覆  
した機関車や貨車が無残にも転がり、列車はゆっ  
くりと火の粉を吹き上げ、ぎしぎしと音を立てな  
がら山路を登ってゆく。ビルマ領に入ると列車も  
夜間運行になり、昼間は空襲を避けて進むようにな  
りました。

ある駅から福井県出身の兵隊が多くなり、知人  
と会う機会があり、玉邑一馬さんと会いました。  
話の最後はインパール作戦の敗北と、全般的戦局  
の厳しさを話していました。列車の進出につれて  
駅で支給される食事も悪くなるばかりでした。

やっとバンコクを出発してから十日目、モール  
メンに無事到着しました。ここは通過部隊も多く、  
道筋には食べ物や皮製品を売る店が並ん  
でいて、にぎわっていました。渡河待ちで滞在す  
ることになり、外出も許され、食堂でカレーライ  
スを食べました。そのうまいこと久しぶりにカレー  
ライスの味と出会いました。そして兵站部の人  
からまたビルマの悲惨な話を聞かされました。

朝、渡河作戦が始まりました。見たこともない大きな河で海のようなでした。発動機付きの伝馬船に三十人ぐらいつつ乗って渡河、対岸に上陸、駅で貨車に乗車して九月三日にラングーンに到着しました。ここで競馬場にある宿舎に入りました。ラングーンに到着はしたけれども私たちが目指す連隊は撤退中で、所在不明とのことで、しばらくここに駐留することになりました。

サガインに行けば「祭」部隊の連絡所があるからと、夜明けに駅まで到着したとき、米軍戦闘機二機が機銃掃射して来ました。「ダダン！ピュン！」と弾丸が飛ぶ、急ぎ退避する。幸い死傷者もなく、列車の損害もなく夜を待つて出発、サガインに朝到着しました。

サガインの駅は大きく、大きな町のようなのでした。敵空軍機を避けて建物の陰に退避していますと、物売りの女たちが大福餅やバナナ等売りに来るなど一般民家は日本兵に対しては友好的でした。駅構内でラングーン行きの列車と遭いました。こ

れは傷病兵の護送列車で、貨車の中には祭壇もあり、遺骨も併せて護送している列車でした。護送兵からもビルマ前線の悲惨さを聞かされました。九月二十五日、ウントに到着、小隊長より朝の中に渡河するとの命令がありました。朝霧の中に大きな河が横たわる。対岸まで三千メートルぐらいもあろうか、発動機付台船に小隊全員が乗船し、対岸に着き道路に出る。すると道路筋に「祭兵団連絡所」の木札が掛かった家を発見したが、残念ながら家の中には誰もいないためサガイン駅に引き返すことになりました。夜サガイン駅から無蓋車に乗り、九月二十五日ウントーに到着、チーク材の林の中で休息しました。

ここで同年兵の大島君と親戚の渡辺上等兵に会いました。これが最後の別れになるうとは思いませんでしたが、十一月二十日、ビンレブ地区で戦死されたことを、十二月中旬に知りました。夜の私たちはミートキナ方面に出発しました。

ウントーよりは各小隊別に行動することになり、

我が小隊は、山あり畑あり川ありの道の行軍を続け、小さなバコダの寺のある部落に到着しました。寺の近くの田は黄色く稲穂が輝き、畑にはカボチャが連なっておりましてので、夕食に食べました。部落は二十軒ぐらいあり、無人でしたので分散して宿営しました。

十月一日、初年兵全員が一等兵に進級、一同を代表して松田一等兵が小隊長に進級の申告を行い、一等兵の階級章を胸に着けました。十月に入るとマラリア熱発患者が出るようになりました。

十月十日、ナンピ駐留の連隊に合流するため出發しましたが、行軍中私も熱発し、部落に入ると、四十五人と一緒に落伍者となり、途中の寺で休むことにしました。ビルマでの戦闘は、何回か体験しましたが、敗戦ばかりで、その中で次の戦闘だけを申し残したいと思えます。

昭和二十年二月二十六日、コツコの戦闘の一部分です。

二十六日早朝、敵戦車群が出勤の様子で、我が

方は大隊砲一門、重機関銃一台で布陣して迎え撃つ態勢を整える。朝霧の中、第三中隊陣地付近より激しい銃砲の音、何台の戦車と交戦したであろうか。我々は陣地壕の補強に一生懸命。その砲と銃声も止み静かになった。

さては第三中隊は全滅か、負傷兵一人も帰って来ない。悲しいなあ。ゴーゴーと戦車の音が我が陣地に向ってくる。戦車群、何両かなあ、にゅーと出て来た戦車だ。戦車の陰には杉の葉を背負ってロング姿。頭に薄鍋のような鉄甲をのせている。

「敵さんだ！」と叫ぶと同時にバリバリと撃ち合いが始まった。大隊砲陣地を見ると大隊砲も重機も撃ちまくっている。私も小銃を一発、戦友の品川も鈴木も擲弾筒を一発撃つ。中隊長が「撃つな！狙われるぞ」と叫ぶ。敵は激しく大隊砲陣地を攻撃している。物凄い砲声。

敵味方双方共も激しい撃ち合い。それはそれは言葉ではいい現せない激戦。その中を友軍の伝令

が来る。「伝令！伝令！」と叫びながら中隊長に「大隊長殿も副官殿も戦死されました」との悲しい報告。「大隊長殿の壕の上に敵の戦車が停止しています」とのこと。程なく銃声が止む。大隊砲陣地を見ると大隊砲も重機も置き去り、兵の姿は見えない。全滅が残念。

敵の戦車が動き出した。一両、二両、三両と右に行く。四、五、六両が左に行く。残る一両が我が陣地正面二十メートルぐらいで停止した。その途端一斉に自動小銃を発射、機銃目掛けて乱射する。我が方の軽機も応戦する。

敵の乱射の様子を壕の中から頭を出して見る。手には手榴弾二個を持ち、来たら吹き飛ばしてやると身構える。軽機が破壊された機手の松村、桶屋両上等兵は負傷。敵は我が方を少数と見たのか自動小銃を乱射しながら喚声を上げつつ突撃して来る。

敵兵目掛けて一斉に「それくらえ」と手榴弾を投げる。爆発音と共に喚声が止む。中隊長が「今

だ、退れ！」と叫び、一斉に草原の中に逃げ込む。中隊長と林軍曹は右へ、私と福島少尉は左へと分かれて逃げ込む。ふと振り返ると少尉殿の姿が見えない。「しまった」と思ったが探す暇がない。

私は無我夢中で走り草原から出ようとすると、ゴルカ兵が五、六人うろろしている。「駄目だ」とまた草原の中に逃げ込む。日本の兵隊を火あぶりにしようと、ゴルカ兵が草原に火をつけ燃やし始めたので、バリバリと草原が燃え出した。

「さあ大変」と出口を探して走り回る。やっと焼け跡を見つけて出ると、百メートルぐらい先に敵の戦車とゴルカ兵が待ち構えていて、三十メートルぐらい先のバナナ畑に逃げ込む日本兵めがけて自動小銃の乱射、戦車砲まで射ち込んでいる。

「ここも駄目だ」。ふと見るとすぐそばに窪地を発見、そこに飛び込み身を伏せる。そして燃え残りの草をむしり取り、身体に覆ってしばらくこの窪地に身を潜め様子を見ようと覚悟を決める。

空には敵のヘリコプターが低空から人を探して

いる。これでは出るに出不れない。敵は夕方には引き揚げるに違いない。それまで辛抱しようと、いい聞かせて辛抱した。夕方になると予想通り敵兵は引き揚げ始める。白い半袖のシャツに半ズボンにヘルメット姿の白人将校、その後にゴルカ兵が続き、戦車の周囲に集っている。

この敵兵の引き揚げる姿を確認し、「今だ」と、窪地からバナナ畑目掛けて一目散に道に出る。その途端「バアーン！」と一発が目の前で炸裂、急ぎバナナ畑に転がり込む。額から血が流れる。手で拭いながら畑の中を一目散に走る。周囲は暗くなる。すると「おーい」と呼ぶ声がある。

「友軍だ！」「おーい」と返事して大木のそばに走り寄ると、根元に二人の日本兵。「桶屋上等兵殿ですか」と呼ぶと「黒田か、大変な戦であったなあ！中隊の人たちは逃げられたか！」と尋ねる。もう一人の伍長殿は知らない人でした。三人は激しかった戦闘の模様を話しながら、夜空の星を目標に南へと走り、ようやく連隊本部へたどり

着きました。

ロウソクの明りのなかで、連隊長は自ら出迎え「ご苦労であった」との言葉を頂き、「額の傷の手当を受けなさい」と有り難い言葉を頂きました。後年、生き残りの先輩から、二月二十六日の戦闘の模様を聞いたことを次に付記します。

二十六日早朝より戦闘開始、第三中隊の小隊長が木に登り敵戦車の数を調べたところ四十両が進撃して来た。第三中隊陣地には敵戦車七両が来襲、中隊長が壕から飛び出されると同時に、敵弾が命中し中隊長戦死。中隊長はじめ戦死者は置き去りのまま。

歩兵砲中隊長の話では、敵戦車七両来襲により、大隊長、大隊副官、重機関銃隊員も戦死、歩兵砲も重機関銃も放置したまま逃げた。あの激しい戦況の中で、逃げるのが精いっぱい、戦死者も砲も重機も置き去りするしか方法はなかったと。

戦車四十両に掩護された敵軍の優勢には手も足も出なかった。恐らくビルマ全滅の戦闘が同じよ

うな状況であつたらうと想像されます。

私の身代わりとなつた鈴木、西川両戦友、また福島少尉の当番兵でありながら見失つた責任は、生涯頭から去ることはありません。

ビルマ各地で転戦し、命を長らえて終戦を迎え、バンコク港からアメリカ軍のリバティー船で鹿児島港に入港し、昭和二十一年六月二十七日自宅に帰ることができました。

あの悲惨な無茶苦茶な戦争を二度と起してはならないと心に決めております。後年四回ビルマの戦跡巡りに参加することができましたので、戦場跡各地で花を供え、安らかなご冥福をお祈り致しました。

亡き戦友の 冥福祈り 香を炊く

合す両手に 涙溢るる

許せよと 花を捧げて 詫びながら

過ぎしあの日の 戦偲びて

逃げまどう あの日のことを 思い出し

二度と起すな 悲劇の戦

## マラリア病が私の命を救つた

長崎県 木下 豊吉

昭和十二（一九三七）年七月七日、突然支那事変が勃発し、世の中が騒然となりました。私たちの住む田舎町でも赤紙の召集令状により、三十代の働き手が出征して行きました。

私は大正十二（一九二三）年十二月十日、農家の三男坊として生を享けました。そして昭和十三年三月、大三東小学校高等科二年を卒業しますと、知り合いの紹介により長崎市の菓子屋に、菓子作りの見習として就職しました。

支那事変の戦火は日ごとに拡大し、昭和十六年九月の初め、私にも白紙の召集令状がきました。それは佐世保海軍工廠の徴用工として勤務することでした。仕事は海軍工廠に勤務する人たちの加入している民間保険料を、給料から天引して納入する仕事で、肉体労働ではなく助かりました。